

# 処女が重い！

～一夜からはじまる上司とのアブナイ関係～

## 目 次

処女が重い！ ～一夜からはじまる上司とのアブナイ関係～	5
番外編 ドレスか白無垢 <sup>しろむく</sup> か、それは重大な問題だ	253

処女が重い！

～一夜からはじまる上司とのアブナイ関係～

「処女が重いんです！」

素面なら、絶対に言わないセリフを、私——結城操は酒の勢いに任せて上司に吐き出した。

それは金曜日の都内のバーで、時刻は日付が変わる一時間前。終電で帰るとしたら、そろそろ店を出ないといけない時間だった。

「どうにかして脱処女するため、結婚相談所にも登録しました。合コンにも行きました。……連絡先を交換して、デートに誘ってくれた人もいます。でも、いざとなると躊躇してしまうんです。過去の失敗がどうしても頭をよぎって……また相手をつかりさせてしまうんじゃないかって不安になるんです」

そう言って、私は残っていたカクテルを一気に飲み干した。

「元彼に別れ際、言われました。お前じゃ勃たないんだって。……私の女としてのプライドをズタボロにしたあの男は、E●になってしまえばいいと思います……呪ってやる！ もしくはハゲろおとおお」

普段、居酒屋チエーンの薄いお酒しか飲んでいなかったのがよくなかったか、口当たりのいいカクテルが、私の精神も酔わせていた。

泣きながら下品な言葉を連発しても、一緒にいる上司は顔色ひとつ変えることはなかった。

私が一通り愚痴をぶちまけて大人しくなったところで、上司が左腕の高級腕時計をちらりと確認し、すっと立ち上がる。

——ああ、もう帰らなくてはならない時間なのか。

ただ時刻を確認するだけの、その仕事さえ洗練されている素敵な上司。本来ならこんな個人的なことを打ち明けられるほど、親しい関係ではない。

今夜、この時間はプライベートだと言ってくれたけれど、それは、私が退職を申し出た結果、悩みを聞いてもらえることになり、話しやすいよう気遣ってくれたからだ。彼が私に対して、男女の感情を持って誘ってくれたわけではないとわかっている。

それでも、他の女性社員との噂を一切聞かない鉄壁の上司と、こうして二人で飲みに行けたのはとても幸福な時間だった。

どうせなら、少しでも楽しい会話をすればよかったのに……今後悔しても遅い。

私は、ふらつきをなんとか抑え立ち上がる。

自分のバッグをひとつと手を伸ばすが、一步早く上司がそれを回収する。

「問題を解決しようか？」

「……えっ？」

思ったより近い距離で囁かれ、心臓が飛び跳ねた。

「その重いバーজন、僕がもうよ！」

§

もし私が、自分のことを包み隠さず自己紹介するとしたら——

結城操。二十七歳、独身。現在、恋人はいない。……そして処女。

大学の服飾科を卒業後、アパレルメーカーに就職。婦人服ブランドのパタンナーとして働いている。

職場では上司や同僚にも恵まれて、毎日楽しく仕事をしている。

私生活では、半年前に長く付き合っていた彼氏と別れてしまったけれど、フラれたこと自体は引きずっていない。

でも私は、別れてから半年たつても、新しい恋をはじめられずにいた。

元カレに最後に言われたあの一言が原因で、女としての自信をすっかり失ってしまったからだ。

父が名付けたと聞く「操」という名前の呪縛か、パートナーがいたにも拘わらず、私には性交渉の経験がない。

キスやそれ以上のことはしたことがある。でも、「一線」がどうしても越えられなかった。

私自身は、結婚まで絶対行為をしないという貞操観念は持っていない。人並みに興味はあるし、好きな人とならしたいと思っていた。

ただどどういうわけか、元カレとはうまく身体を重ねることができなかった。

同郷で幼馴染みだった元カレと付き合うことになったのは、大学卒業のタイミンダ。

それまでは、ちょっと意識し合う仲だけど、一步踏み出せずにいたらだと……という状態だった。卒業したら連絡をしないと会うこともなくなる、そういうタイミンダで彼のほうから『付き合おう』と言ってくれた。正式に彼氏彼女になれた時は幸福の絶頂だった。

付き合いはじめたらすぐにキスはしたし、裸になってそういう行為にチャレンジしたことは何度もある。

けれどお互いのはじめてで、最初にうまくできなかったことが、あとを引いてしまった。

その後、何度挑戦してもできなかった。一度目と二度目は私がひどく痛がったせいで、その後の理由は元カレの名誉のために、一応伏せておくことにする。

徐々に挑戦するのが苦痛になってきて、いつしか甘い雰囲気が消え去ってしまった。

それでもずるずると過ごしてしまったのは、友人や同郷といった共通項がしがらみになっていたからなのかもしれない。

実際に別れてみると、それはなんの枷でもなかったと知ることができるのだけれど。

そんな、情性で続いていた関係だったとはいえ、何年も一緒に過ごしていたのに、私は彼の不満に気付いていなかった。彼が私の知らない間に「脱・童貞」していたと知った時は、本当に驚いた。ある日、彼のアパートの前に、お胸の大きな女の子がたたずんでいた。『彼が好き』と泣きながら訴えられた時は、いつそ申し訳ない気持ちになった。

ここで潔く身を引ける、いい女になりきれれば、どれほどよかっただろうか。しかし彼と二人で別れ話をした時は、やっぱり怒りが込み上げてきて、たくさん文句を言ってしまった。

『なんで浮気したの？』

私が喧嘩腰で問いかけると、彼はこう返してきた。

『お前じゃ勃たないんだよ』

それが私を貶めるためのデタラメならよかったのに、真実だから余計辛い。

それでも彼と別れたあとは、ここから新しい自分になったつもりで、人生を楽しもうと思っていた。恋愛がすべてじゃない。仕事に打ち込んだり、趣味を充実させて自分磨きをしようと決意したりした。

意気込みだけはよかったのに、人生はままならない。

数か月前に、実家の両親からある問題を突き付けられ、今後の自分の人生について悩み出してしまうた。

そして迎えた二十七歳の誕生日。私はとても前を向いているとは言えない気持ちで会社に出勤

した。

前日の夜、時間をかけて書いた退職届を持って。

「会社を辞めたいって？ 結城くん、どうした唐突に？」

「勝手に言って申し訳ありません」

退職届を出したのは出勤直後。

昼過ぎに部長からの呼び出しを受け、私はミーティングルームで上司と面談をすることになった。今、対面に座っているのは、私は所属する婦人部のトップ、瀬尾部長。ファーストネームは諒介さん。純日本人にしては鼻が高く、彫も深く、秀麗な顔立ちをしている。

創業者であり現会長の外孫にあたる瀬尾部長は、三十二歳の若さで婦人部のトップを任されている。

デザイナーとして看板を背負ってきた会長はご高齢で、まもなく引退するという噂がある。その後継者と言われているのは、会長の内孫で、紳士部のチーフデザイナーを務める人物だ。

瀬尾部長は、次の世代に引き継がれていく会社を経営面で支えるために、今後さらに上のポストに就くはずだ。

もちろん、創業者一族だからといって、地位に胡坐をかいているわけではない。低迷していた婦人部の売り上げを回復させた実績を持つ、尊敬すべき上司だった。

そんな瀬尾部長は、私にとって雲の上の人で、遠くから眺めているのがちよどいい。近すぎるに緊張してしまう存在だった。

その瀬尾部長が、今、物憂げな表情を浮かべている。それだけで、とにかく謝りたい気分になった。

「君はこの前、社内コンペに作品を出していたし、新しいブランドの立ち上げメンバーにも手を上げていたはずだ。それなのに急に会社を辞めたいなんて、おかしいじゃないか」

部長に指摘された通りだ。

最近の私は、今まで以上に仕事に打ち込んできた。新ブランドのデザインコンペにも、並々ならぬ意気込みで参加した。

パタンナーの仕事も好きだけど、自分のデザインした服が店頭に並ぶことは、学生の頃からの夢だったから。

うちの会社は定期的に社内デザインコンペを開催している。入賞すれば商品化のチャンスもあるし、コンペで何度も入賞して、今はデザイナーとして活躍している人もいる。

いつかは自分もそうなりたいと思っていた。でも、夢をずっと見続けるのは案外難しい。

「そ、その……なんというか、家庭の事情で」

「ああ、そういうえば、長く付き合っている人がいると聞いたな」

部長が遠慮がちに呟いた言葉に、私はあわてた。

普段は絶対にプライベートを尋ねてはこない部長の記憶の片隅に、そんなどうでもいい情報があつたことにまず驚き、そしてそれが古い情報であることに戸惑う。

社外の彼と別れました、なんて無駄な報告をする機会も必要性もないのだから、仕方ないけれど、部長は自分の顔の前で指を組んで、私の反応を窺っている。浮かべられた笑みは私の警戒心を解くためなのか。

これではまるで「結婚するから退職します！」と私が言い出すのを待っているみたいだ。

「誤解しないでくださいね！ 結婚の話はありません。それどころか、ふりだしに戻ってしま  
う……」

その時突然、ミーティングルームにガタツという音が響いた。

「……別れたのか？」

瀬尾部長が椅子から腰を上げ、なぜか驚いた顔をする。

響いた音は部長が座っていた椅子が立てたものらしい。

「はい」

私が肯定すると、部長は何事もなかったかのように座り直して、今度は独り言を吐き出した。

「そうか、別れたのか」

「はい」

なぜ、二度繰り返したのか。部長にとって重要なことではないはずなのに。

「あの……その件は退職とまったく無関係とは言えないんですが、直接的な原因ではありません。簡単に説明すると、最近いろいろありまして、実家に戻るようになってしまいそうなんです」

「うん？ 話の背景が見えてこない。それに、なんだか退職に対して消極的に聞こえるが、迷う理由があるのか？」

「仕事とは関係ないことなので」

「なるほど、プライベートなことは話したくないと」

「ただの愚痴になってしまっているので」

「愚痴くらい、いくらでも聞かせ。それに、優秀な部下が会社を去ろうとしているのに、放置するなんてできない。せめて納得できる理由を聞かせて欲しい」

「でも……すごく個人的なことで、部長に聞いていただくのは申し訳なくて」

私がそう言うと、部長はしばらくの間考え込んでから、ひとつの提案をしてきた。

「だったら、僕が上司だということは忘れてもらって、あくまでプライベートで話をしよう。今夜、場所を変えて」

そうして終業後、瀬尾部長が連れて行ってくれたのが、一軒のお洒落なバーだった。

案内されたのはカウンターではなく、店内にひとつしかないボックス席。

バーテンダーさんとの距離もあり、大きな声を出さなければ、お店に流れるジャズに紛れて会話

場所を変えて」

そうして終業後、瀬尾部長が連れて行ってくれたのが、一軒のお洒落なバーだった。

案内されたのはカウンターではなく、店内にひとつしかないボックス席。

バーテンダーさんとの距離もあり、大きな声を出さなければ、お店に流れるジャズに紛れて会話



の内容は届かない。デキる上司はお店選びも完璧だ。

最初はビールベースのカクテルを注文して、あたりさわりなく仕事の話をした。

二杯目は、部長が私の好みに合わせて柑橘系のカクテルを注文してくれ、趣味だという釣りの話をしてくれた。

緊張が解れてきたところで、三杯目の甘いショートカクテルが目の前に置かれる。そろそろ退職の理由をちゃんと説明しなければと、私は思い切って切り出した。

「仕事を辞めようと思ったのは、しばらく前に交際していた彼と別れたことが、きつかけといえばきつかけで……」

瀬尾部長が不思議そうに見つめた。

「君は失恋をしたら、それを糧に頑張ってくれるタイプだと思っていたよ」

「その通りです。もう恋愛はいいから、仕事に生きてやる！ って、この半年頑張りました」

口当たりのよさとは裏腹に、度数の高そうな赤い液体を、私はごくりと飲み込んだ。

「元カレは同郷の幼馴染みだったんです。だから、別れたことを黙っていたのに、数か月前、実家の両親にばれてしまい……。私は一人娘のため、結婚しないなら実家に戻って、家業を手伝いながら地元男性とお見合いしろと言われました。それがいやで、ずっと誤魔化していたら……先日とうとう、母に泣かれました」

「早く結婚させたいだけなら、なにも会社を辞める必要はないんじゃないか？」

「その通りです。実際には、両親は私を連れ戻して、父のお気に入りのお弟子さんと結婚させるつもりなんです。でもその人と私、これっぽっちも気が合わなくて」

その人は、家具職人である父の工房で働いている。

まだ私が実家にいた高校生の頃から顔を合わせる機会があったが、よい印象がない。いつも睨んでくるし、きつい態度が少し怖かった。

彼も私のことをよく思っていないようだったので、お見合いの話も、相手から断ってくるだろうと甘く見ていた。

しかし、なぜか先方も承諾していると母は言う。

「お弟子さんは私と結婚すれば、父の跡継ぎになることが確約されるので、断らないつもりみたいなんです。だから、私は母を説得できる理由を探さなくてはいけなくて、つい、もう別の彼がいるからと嘘を……」

一度嘘を吐くと、それを守るためにどんどん嘘の上塗りをしてしまう。

最初は新しい恋人ができたと伝え、お見合いの話を断っていた。

代わりに、相手がいるならちゃんと紹介するようになると言われたが、私はそれを曖昧にかわし続けた。

まだ付き合いはじめたばかりだから、相手の負担になるようなことはしたくないと私が言えば、それは誠実な対応ではないと母は返してくる。

仕事の忙しさを理由にすれば、たった一日の都合がつけられない理由を問いただされてしまう。結局母は納得せず、今私は新しい彼を紹介するか、お見合いをするかの選択を迫られている。

「嘘を本当にしようと、こっそり婚活してみたのですが、まったく、全然、どうにもなりません……」

「まったくってことはないだろう。君は若くて綺麗きれいなんだから。もしかして、前の恋人が忘れられないとか？」

「まさか、そんな、違います！」

「ものすごく理想が高い？」

「身のほどは、わきまえているつもりです。……そうじゃなくて、ちゃんと原因があつて……」

——思えば、この辺りから相当酔いが回つていたのだろう。そして瀬尾部長はかなりの聞き上手だった。

だから、思わず言つてしまった。婚活がうまくいかない最大の原因を。

「処女が重いんです！」

ため込んでいたものを口にしてしまえば、それだけでなんとなく心が軽くなる。

一番恥はずかしい部分を告白したことで、怖いものがなくなり、元カレに言われた言葉がきっかけで、自分に自信が持てないこと、合コンで知り合った相手とのデートで逃げ帰ったことも赤裸せきら々に打ち明けた。

「女としての魅力に欠けている私が、新しい恋人を作るなんて無理なんです」

もういつそ、親の望むように田舎へ帰るべきかと、気持ちがあきらめの方向に傾いたのが数日前。そうして、誕生日の今日を節目にしようと、退職届を出すことに決めた。

ぐだぐだと、要領を得ない話になっていたかもしれない。途中で下品なことを吐き出していたかもしれない。

私が「……そんなわけなんです」と、話を締めくくったところで、返ってきたのは長い沈黙だった。

「つまらない話をして申し訳ありませんでした」

「いや……」

その時の部長は、珍しく困った顔をしていた。

私は、情けない話をしてしまったことを後悔する。

部長は自分の腕時計を見て、時間を確認すると無言で立ち上がった。

もう帰らなければいけない時間だったのかと、私もゆっくり腰を上げる。

「経験があれば、君は自信を持てるのか？」

ふらつく私を部長がさかさず支えてくれた。

触れられた腕に力が込められ、身体が傾く。

互いの距離が縮まって、声が耳の近くから聞こえる。いつも聞いているはずのその声が、まったく

く違う人のものに聞こえた。

そこにいるのは、信頼の置けるいい上司ではなく、危険な異性。

「問題を解決しようか？ ……その重いバージン、僕がもらうよ」

「……」

瀬尾部長の思わぬ誘いに、頭より、先に身体が反応した。一瞬なにを言われたのか理解できずにいたが、酔いは一気に醒めていく。次いで、お酒によるものとは違う熱が、私の顔を耳まで真っ赤に染める。

「あの、私」

提案を受け入れることも、拒絶することもできずにいると、部長は淡々と会計を済ませ、私の手を引いた。彼の手を払いのけることができない現実が、私の本心を表している。

「僕の部屋とホテル、どっちがいい？」

店を出てタクシーを待つ間に、部長がまた私の耳元で囁いた。耳から入った声が、身体を駆け巡り、私はびくりと肩を震わせる。信じられない。

真面目で、寡黙で、特に女性社員に対してはクールな瀬尾部長が、今どんな顔をして私を誘っているのか。

見上げるように顔を窺うと、部長は目を細めて笑った。それは職場では絶対に見せない顔だ。私は嬉しくて、夢でもいいから、湧き上がった情熱にそのまま流されてしまいたいと思った。

回らない脳をフル回転させて、部長から与えられた選択肢について考える。

部長の部屋か、ホテルか――

部長が一人暮らしたとしても、部下の私上がり込むのは気が引ける。

「あの、ホテルつてどの辺りのホテルですか？」

私の感覚だと、こういう時に利用するのは、手軽にカップルが宿泊できるラブホテルだ。でも、部長と私が同じ感覚を持っている自信がない。

「近場だと、あそこはどうだ？ 空気を確認してみようか」

部長が示した建物は、都内に住んでいる人間なら誰でも知っている高層ビルだった。確か、そのビルの中には、お高いことで有名なホテルが入っている。

「あ、あ、あの、じゃあ、私のアパートで……狭いですけど」

不要品をもらっていた側としては、部長にホテル代金を払わせるわけにはいかない。でも高級ラグジュアリーホテルに連れていかれたら、高額な宿泊費の支払いが怖い。そもそも部長は払わせてはくれないだろう。

だからお金の心配をした私は、第三の提案をしたのだ。

「アパートか……。それは却下だな。壁が薄いのは好きじゃない」

苦しまぎれに出した提案をさらりと一蹴される。この返答は、ただのセレブ発言なのか、それとも壁が薄いと不都合が生じる事態になるからなのか、あるいは両方なのか……などと無駄なことを

悶々と考えている間に、タクシーが目の前に停車する。

部長が運転手に行き先を告げると、すぐに車は発車した。

車の窓越しに見える都会の夜景。珍しくもない景色が特別に思える。車の中で私は一言も発せられず、ただうるさく鳴り響く自分の鼓動の音を聞いていた。

顔も火照って、きつと赤くなっている。期待と緊張だけが増幅し続けることに限界を感じはじめたところで、タクシーがハザードランプをつけて停車したのは、住宅街にあるコンビニエンスストアの前だった。

二人でタクシーを降りたあと、部長は、買い物があるからと私を店の前で待たせて、一人で店内に入っていた。なにを買うのか窓ガラス越しにこっそり眺めていると、彼は小さな箱をひとつ手に取って、レジへ持っていた。

それが避妊具であると察した私は、恥ずかしさのあまり、戻ってきた部長と目を合わせることができなかった。

「お待たせ」

部長は平然とした態度で、私の手を引いて歩き出す。

数分後。辿り着いたのは、外壁がコンクリート打ちっばなしの小さいマンションだった。

部長はエレベーターに乗り込み、五階まであるうちの四階のボタンを押す。おそらく部長の自宅

なのだろう。

噂によると、瀬尾部長の父親は、うちの会社とは直接関係のない大きな企業の経営者だという。

御曹司だから、高級タワーマンションに住んでいるのかと想像したけれど、小さいマンションの一室なんて、案外庶民的で親近感を持つ。

親がお金持ちで、将来有望で役職がついていても、サラリーマンはサラリーマン。

私が想像できるくらいのお給料だとしたら、当然と言えば当然だ。

……そう思っていたのは、短い間だった。

到着したフロアに、扉がひとつしかないことにまず違和感を持った。

共有スペースの通路に、たくさんの扉が並んでいるような、私知ってる集合住宅とは随分印象が違う。

実際に扉が開くと、奥には想像以上の光景が広がっていた。

「すごい広い……それに、なんでマンションなのに部屋の中に階段があるんですか？」

「メゾネットタイプになってるんだ。広さは一般住宅とそう変わらないよ」

「四階と五階、全部が部長のお部屋ということですか？ 一人で住んでるんですよね？」

「ああ、だから使っていない部屋もある」

「そんな、もったいない……」

思ったことを、うっかり口に出してしまい、私はあわてて口を押さえた。

「もしかして、浪費家だと思われているのかな？」

「いえいえ……」

「この年だから、将来のことを視野に入れて購入しただけだ。投資で利益が出た時にね。さあ、遠慮せずどうぞ」

促され、部屋の中に足を踏み入れる。

大理石の玄関……といっても段差がなく、部屋の間仕切りもない。フロア全体が見渡せる場所で、私は立ち尽くした。

背後で施錠していた部長が「靴のままでもいい」と教えてくれる。……ここは本当に日本なのだろうか。

「誤解がないように言っておくが、いつも部屋に女性を連れ込んでいる訳ではない」

それはそうだと思う。こんな場所にほいほい女性を連れ込んだら、帰りたくない人が続出して困るに違いない。

私だって、憧れの上司のご自宅に入れてもらえて、正直かなり舞い上がっている。

「社内の人間を連れて来たのはじめてだから。この意味、わかっている？」

意味深に問われ、私は試験時間終了間際に解答用紙の空欄を埋めるように急いで答えた。

「わ、わかっています。絶対に勘違いしたりしません。部長は私のいらないものをもらってくれるだけです。大丈夫です。職場で自慢したり、気安く声をかけたり、そんなこと絶対しませんから、安

心してください」

割り切った大人の関係と言えいいのか。わかっている。ちゃんとわかっているつもりだ。

それはそうと、心配なこともある。

「あの、部長は私が相手で楽しめますか？ 処女つめんどくさいって……」

都市伝説的な男性の意見が、すでに私の固定観念になっている。

心配になって部長を見上げると、彼は優しく笑って顔を近づけてきた。反射的に逃げるように引いた顎を逃さないと、くいと持ち上げられる。

「んっ……ん、ん………部長っ」

何度か角度を変えて唇を重ね合う。ふんわりとお互いのアルコールを含んだ吐息が混じり合って、また酔ってしまいそうだ。

口付けのたびに身体の距離も近付いて、もつれるように抱き合った。

膝は震え、ヒールのある靴では身体を支えきれなくなっている。思わず部長の首に腕を回すと、

口付けはより深くなり、舌が絡み合う。

いやらしい、まるで恋人同士みたいなキス。

「はあっ……んっ……んっっ」

なんでこんなに興奮しているんだろう。どんどん荒くなる息遣いに、少しだけ残っていた冷静な私が疑問を投げかけてきた。

(そっか、私、キスも久しぶりなんだ)

キスだけで倒れそうなくらい翻弄<sup>ほんろう</sup>されている。やっぱり経験値が高い大人の男は違う。

部長はとにかくキスがうまい。いや、うまい下手を判断できるほどの経験はないけれど、このキスが好き。

呼吸の方法を忘れがちになり、思い出したように鼻で大きく息を吸い込むと、スーツから魅惑的な大人の香りがした。

部長は私の下唇をペロリと舐<sup>な</sup>め、いたずらを思いついたように言った。

「正直、処女はめんどくさい」

「えっ……」

もしかして、私のキスが下手だった？ 魅力も経験もない私じゃ、やっぱり部長を満足させられない？

戸惑う私に、部長はまた軽く唇を重ねる。

「ついさっきまでは、僕もそう思っていたけど考えが変わった。君に処女だと告白されて、なぜかわからないがとても興奮した」

どこがどう興奮したのか、グッと下半身を押し付けられて思い知る。

「新しい性癖を覚めさせた責任をとってくれるかな、結城くん？」

口の端を片方だけ上げて笑う瀬尾部長は、職場では絶対に見せない危険な光を瞳に宿していた。

部長が、寝室があるという上階へ案内してくれる。上階は温かみのあるクッションフロアになっていて、独立した部屋がいくつかあるようだった。

螺旋階段<sup>らせん</sup>を上がっていった廊下の一室が、主寝室。

セミダブルのベッドと一人掛けのソファアチェアと、小さいテーブルがあるだけのシンプルな部屋。室内には入り口とは別の扉があり、そこはクローゼットになっているようだ。

「シャワーはあとでいいだろう？」

部長は足を踏み入れたものの、これからどうすればいいのかわからない。戸惑っていると部長が背後から私を抱きすくめる。

——セックスをする前って、こういうものなの？

それが、割り切った関係だったとしても、その一瞬だけは恋人同士みたいに触れ合うのが普通なの？

部長が、胸元まである私の髪を払いのけた。首筋にそっと唇が触れると、それだけで甘い痺<sup>しび</sup>れが生まれる。

「で、でも、私、きっと汗かいてるし………んっ、部長っ！」

チュ、チュと首筋を吸われて、くすぐったさより官能的な痺<sup>しび</sup>れが強くなっていった。

「ここで中断したら、君がグダグダ迷いはじめそうだから」

「……部長、今日はなんだか意地悪です」

「僕も、自分にこんな一面があるなんて知らなかった。普段は女性の気持ちを最優先している」

「だったら、今日もそうしてください。先にシャワーを使わせてもらえませんか？」

「だめだ」

部長は少し強引に私の身体を抱きかかえ、そのままベッドまで歩いていく。

「やっ、重いから」

大人になってから、誰かに全体重を預けたことなどない。落下の恐怖から、部長の首に腕をまわしてしがみついた。

すぐに柔らかいマットレスの上に丁寧に下ろされる。私の家のベッドと違う、身体を包み込むような心地よさが、抵抗する意思を鈍らせる。

私がベッドの海で溺れている間に、乗りかかってきた部長の身体に完全に動きを封じられてしまう。

「やて？」

どうしてやろうかと、部長が不敵に笑う。

部長の手がそっと伸びてきて、服越しに私の胸をなぞっていく。敏感な先端部分は、まだ服と下着に包まれているのに、触れられると否応なく主張してきてしまった。

部長は、その部分をおもしろそうに何度も擦った。

これは恥ずかしい。部長の微笑みは「服の上からでもわかるぞ」と、私のはしたなさを指摘しているようだ。でも、恥ずかしいのに、気持ちがいい。

何年も眠っていた、自分の女の部分の情熱をこれでもかと呼び起こされて、じれったさが増していく。

「あの、愛撫とか、あまりしなくても……」

急いだ気持ちになり、思わずそう言った。

今の部長にじっくりと時間をかけられたら、特別な感情が生まれてしまいそうだ。手遅れになる前に引き返さないと、戻れなくなる。

「やっばりおかしい……」

部長が私を不思議そうに見つめる。

「私が？」

「いや、僕が。いやがられると、すすんでしたくなる。時間をかけるなど言われたら、朝まで翫ってみたい気がしてきた」

「冗談ですよね？」

「僕は、あまり冗談を言わないタイプなんだ。……早く終わらせたいのなら、自分で服を脱いだらどうだろう」

「でも、部長が上に乗っていたら脱げません」

「頑張ればできるさ。ほら、上だけでも」

私の腰は、部長の膝にがちりと挟まれていて、完全に身を起すことはできない。動かすことができる手を伸ばし、カットソーの裾を引き上げる。身をよじり、なんとか頭を浮かせて服を脱いだ。

「なんだ、器用なんだな」

もたつく様子を楽しみたかったのか、つまらなそうな顔をする。本当に意地悪だ。こんな人だなんて知らなかった。

睨みつけると楽しそうに顔を近付けられて、なぜか鼻をつままれた。

驚き、目を見開く。これでは鼻で息ができないから、当然口も開く。

「んっんんん——！」

まるで、私の喉の奥を指しているかのように、部長の舌が滑り込んでくる。

荒々しく口の中を犯された。唾液が混じり合い、舌が拗めとられる。歯と歯がぶつかりカチッと小さく音を立てても、さらに奥を探ってくる。

いつの間にか、部長の指は鼻から離れていたけれど、息をするのも危うく忘れそうになった。苦しさから彼の胸を何度も叩くと、ようやく解放される。

「はあっ、はあっ……私の息を止める気ですか？」

ほんのり眦に涙が浮かぶ。

「やばい……」

部長は口元を手で覆いながら呟いた。

「君がいやがったり戸惑ったりしている姿を見ると、たまらなく興奮する。正直自分でもかなり混乱している」

そう言いながら、部長は私の上から退いていく。

私はようやくその重さから解放され、ほっとする。でも部長の目は、私を自由にしたふりをして、実は逃がさないとしつかり見張っていた。

危険な人から逃れたい私は、そのままうしろにズリズリと後退る。ベッドのヘッドボードまで辿りついた時、今度は簡単に足首を捕らえられた。

「やっ……」

片方の膝裏を持ち上げられて、スカートの中が彼の視界に晒される。ピリッと破かれたのは穿いていたストッキングだ。

「部長……やだっ」

破かれた隙間から部長の指が滑り込み、私の秘所に触れる。

「しつかり濡れてるじゃないか」

部長は私の秘密の谷をなぞり、溢れていた蜜をすくい取るよう指先に絡めた。そして、濡れた指先を私に見せつけたあと、それを自分の口に含んだ。



「そんなこと、しないでください。……汚い」

「汚くなんてないさ。君も興奮している証拠なんだから、嬉しいよ」

私は羞恥のあまり耳を赤く染めた。このいやらしく危うい行為に、味わったことのない興奮を覚えていたことは否定できなかった。

煩わしそうにネクタイを外した部長は、シャツのボタンを、上からいくつか外していく。

その所作に思わず見惚れる。男性らしいほどよく厚みがある胸元が覗き、私はごくりと唾を呑み込んだ。

美しい裸体を披露してくれるのかと、期待しながら待っていると、部長は服を緩めただけで、また私の服を脱がしはじめる。

ブラもスカートも、さつき破いたストッキングも、すべてが剥ぎ取られていく。結局全部脱がすのなら、わざわざ破く必要はなかったのに。

自分だけ裸になるのは恥ずかしい。それもきつと、部長の意地悪のひとつだ。

身体を隠すものがなくなると心もとなくなり、私が胸を自分の手で覆うと、部長はさつき外したネクタイを手を持った。

「隠すと、縛りたくなる」

目が本気だ。

「痛いのと、苦しいのはやめてください」

「君が本気でいやがることはしない」

なおもネクタイを手を迫ってくる部長を、私は必死で押しつけた。

「それだけは本当にいやです」

「……わかった、今日はしない。その代わり、ここへ来て自分からキスをして？」

ししぶ手にしていたネクタイを手放した部長は、ベッドの上にあぐらをかくと、そこを指して言う。

下着すらつけていない私が、高そうなストラックスをはいたままの部長の上に、直接座ることはできない。めいっばい近付き、膝について唇を寄せる。

「もっと激しく、舌を絡めて」

要求通りに、懸命に舌を絡ませる。さつきまでの一方的に受けるだけの口付けとは違い、急に自分が淫らな女になった気分になった。

私の秘所は、触れられてもいないのに、またじつとりと蜜をしたたらせていく。

「あっ……」

口づけの最中に尖った胸の先を刺激され、思わず小さく喘ぐ。唇を離してしまうと、後頭部に部長の片方の手が回り、また距離をゼロに戻された。

キスをやめたことを咎めるように、先端を強くいじられ、そのたびに私はぐもった悲鳴を上げた。

胸をいじっていた部長の指が、やがて下へと移動していく。内腿をとんとんと叩かれ、足を開くように促された。できた足と足の隙間に彼の指が忍び込む。

くちゅ、くちゅと、上からも下からも、聞きなれない水音が響き、私を淫猥な世界に誘い込んでくる。

「んっ……、やつ……んっ、ンン」

唇を離すとなにをされるかわからない。部長の肩にしがみつき、必死に食らいつく。それでも一番敏感な肉芽を執拗に攻められたら、せり上がってくる強い刺激に耐えきれない。

「ああっ、あっ……そこはっ！ やっ……」

喘ぎながら、空気をたくさん吸い込んだ。不足していた酸素が急に身体を駆け巡り、痺れとだるさが襲う。

部長の肩にもたれかかって、それでもなお、やまない刺激の波を震えながらやりすごす。

「……もう、いれてください」

このままこの人に翻弄され続けたら、自分が自分でなくなってしまう。未知の領域へ足を踏み入れる恐怖より、終わりの見えない快樂に不安を覚える。だから、私は早い決着を望んだ。

「まだ、ほぐしてない。痛いのはいやなんだろう？ 指で慣らすから、もう少し足を開いて」

たっぷりと潤っていた蜜口は、指の侵入を簡単に受け入れた。

入り口を掻き回すように探られると、とろりとした蜜が溢れて内股を伝う。

そのことに彼も気付いたのか、にやりと私を見た。

「指を増やしてみようか」

すぐに二本目の指が差し込まれる。

「二本目も余裕だ。ひくひくと喜んで啜え込んでいる」

部長の指先が、奥からなにかを掻き出すように刺激を与えてくる。指の動きに応えるように、私は自分の身体から湧き出てくるものがあると自覚した。

ピチャ、ピチャと水音が響く。

「あっ……あっつ、だめっ！ 汚れちゃうから」

彼の手も服も、ベッドを覆うシートも、私のいやらしい蜜で汚れてしまう。

やめてと懇願しても、私を追い詰めることに夢中な部長は、決して手を止めてはくれなかった。

「構うものか。……汚していい」

さらに強く奥を刺激され、自分が制御できなくなった。

「あっ、あっ、やつ……あああっ」

指を追い出すように中がうねる。ひくひくと蜜口を痙攣させながら、シートに雨を降らせていく。全身が些細な刺激にも感じてしまうほど敏感になり、私はその場にくたりと倒れ込んだ。

「……もう、いれて」

このままでは、本当に朝まで廻られる。追いつめられた私は、もう一度力なく自分からねだった。

それでも部長は自分のモノを解放することなく、今度はどろどろに汚れた秘所に、顔を近付けた。「やあ、汚いからっ……それはやめて、やあっ……あっ、あっ」

指で、舌で、溶かされ、穢けがされ、おかしくなりそうになる。どれくらいの間その行為が続いていたのか、時間の感覚がなくなるほど乱された。

「部長、ほんとにもう無理です、いれてください」

「肩書で呼ばれても、その気になれないな」

「瀬尾さん、お願いします」

「やり直し」

「……諒介さん、お願いします。いれてください、もう待てないの」

私が何度も懇願こんがんすると、部長はベッド脇に置いてあった避妊具を手にとった。自身の昂たかぶりを露あらわにして、繋がる準備をしている。その雄々しい姿を前に、ようやく望みが叶うのだと、私の身体は歓喜で震えた。

——一体今まで、なにをそんなに怖がっていたのだろう。今の私には、一線を越えることにためらいがない。彼から、怖がる隙を与えられてはいないのだ。

正面から硬く太い竿さおを押し込まれる。強い圧迫感が襲うが、我慢できないほどの痛みはない。

「……っん」

「大丈夫か？」

「はい……」

ゆっくり腰をすすめながら、安心させるように、私の頭を撫なでてくれる。

口付けで蕩かされながら、部長の熱い塊かたまりが私の奥の奥まで辿たどり着いた。私の身体の中に、自分以外の大きな存在がある。否いや応おうなく実感させられると、少しだけ怖くなった。

「部長……んっ、ふう、もつとキスして」

なにかにすがりたくて、私は自分からキスをねだった。

部長の熱い舌が私の口内を犯すたびに下腹部が疼うずき、自分の中に収まっているモノの存在を余計に強く感じてしまう。

「そんなに締め付けないでくれ。よすぎて余裕がなくなりそうだ」

「あっ……ごめんなさい……でも無理、だつてこんなに大きいモノが……」

「痛い？」

「んっ……痛みは、それほど……でも、どうしていいのかわからなくて」

私がそう言うと、部長は繋がったまま自分だけ身体を起こした。

「力を抜いて、ゆっくり呼吸をするんだ」

秘部にある私の小さな突起に、部長が刺激を与えてくる。

じつとりと濡れてよくすべるその部分は、軽く擦られただけで、強い刺激が生まれる。全身を駆け巡り、波のように何度も押し寄せる快感を、私は確実に拾っていた。

ぎゅっぎゅっ、と、自分の中にいる欲望の塊を締め付けてしまう。

部長は苦しうに顔を歪め、額に汗を浮かべた。

締め付けてはいけないと言われたけれど、無理だった。

「んっ、あ、それ、だめです。触らないで。身体が言うこと聞かないの」

「ここでは気持ちよくなれない？」

「わからない、でも、部長が苦しうだから、だめなんです。……あっ、んあっ」

快感を逃がそうと、シーツを掴み、私は腰をくねらせた。

「つく……。君がかわいすぎて、辛い。……少し、動くから」

部長は慣れない私のために、自分を抑えてくれていた。その優しさがたまらなく嬉しくて、愛おしくなる。

でも私は、彼にそこまでしてもらえるほど価値がある存在ではない。

「私……大丈夫ですから、もっとめちゃくちやにして……。ひどくしてほしい」

一晩で終わる関係なら、完璧な思い出なんていらぬ。これ以上優しくされることが怖くなった。

「煽った君が、いけない」

——痛いほうがまだいいのに。そんな想いとは裏腹に、私の身体は律動から、痛み以外のものを拾いはじめてしまう。

これを快感というのかはわからない、とにかく強くて激しいものに圧倒される。

「はあっ、諒介さん、部長……。ああっ、激しくて、んっ」

ぽたりと、部長から流れ出た汗が、肌に落ちる。そのわずかな刺激さえ快感となって私を満たす。部長の先端は、私の奥までちゃんと届いていて、もうそれ以上先には進めないはずだ。それなのに、彼は何度も最奥の壁を叩いて、まだ未到達の地がないか探し求めている。

腹に近い部分を強く刺激されると、そこではつきりと快楽を感じた。泉のように淫らな雫が次々と溢れてくる。けれど部長の昂った陰茎が栓になって、放出を阻む。

「あっ……。部長、私もう無理、だめっ、だめっ、私おかしい」

「いいんだ、おかしくなって……操」

はじめて名前を呼ばれ、それが合図だったかのように、大きな白い波が襲ってくる。

腰を浮かせ、くねらせ、淫らに叫び、逞しい男の人の身体にすがり付きながら、私は果てた。

## S

疲れ切つてうとうとしていたら、空は闇の色から、明るい青さを取り戻していた。隣に瀬尾部長の姿は見当たらず、私は部屋に一人だった。

部長のものらしき部屋着のシャツが、私の身体に無造作にかけられていて、とりあえずそれを羽織り、立ち上がる。

自分の服はどこだろうと見回すと、ソファアーチェアの上いきつちりと畳まれ、置かれていた。そして、新品のショーツとストッキングと歯ブラシ、旅行用の洗顔セットも一緒に用意されている。「うわぁ」

どれも男性が一人暮らしをしている家には置いてなさそうなもの。

グレーの綿素材のショーツも、洗顔セットもよくコンビニで見かける商品だ。

(まさか、部長が一人で買いに行ったの?)

一体どんな顔をして、早朝のコンビニのレジに持って行ったのか。

想像しながら、おかしさと気恥きはずかしさで頬を緩めていると、ガチャリとドアの開く音がして、

バスロブ姿の部長が現れた。

「おはよう。起きたのなら、シャワーを浴びてくるかい?」

「はい、お借りします。あの……これ、買ってきてくださったんですか?」

「ああ。それしか売ってなかったから、好みに合わなくても我慢してくれ」

部長は缶コーヒーを買う感覚で、女性用ストッキングを買いに行けるらしい。ためらう人も多そうなのに、さらっとやってくれるなんて、すごい。

「シャワーの間に、僕は朝食を用意しておくから、済んだら下のダイニングにけるといい」

朝からさわやかに部長のおもてなしを受けて、私はただ戸惑った。昨日の意地悪な人はどこへ行ったのだろう。部長も実はお酒に酔っていたのかもしれない。

急いでシャワーを浴び、買ってもらった下着と、着て来た服に着替え、下の階に向かう。

階段を下りていくと、コーヒーと香ばしい食べ物の香りが漂たなっていた。

「たいしたものはないけど、……そこに座って」

コーヒーとトーストとサラダ。特別な品でなくても、人に作ってもらった食事はいつもよりおいしく感じる。

「今、どんな気分だ?」

しばらく無言で食事をしていた私に、部長が問いかけてきた。

「えっと、コーヒーがおいしくて、朝からとてもいい気分です」

「いや、そうではなくて、経験したらなにか気持ちが変わった?」

「……なにも、変わってないみたいです」

私は部長に嘘をついた。

本当は、昨日の私と今朝の私は全然違う。今朝の私の心は、すっかり部長に占拠されてしまっているからだ。新しい恋人探しのことなんて、もう考えられないくらいに。

「仕事を辞めたい気持ちに変わりはないということか……」

「あっ、いえ……それは!」

私と両親の問題はなにも解決していないけれど、今は、まだ仕事を辞めたくないという気持ちが強まってしまった。目の前にいる、彼と同じ場所にいたい。

「五年も頑張ってきた仕事だ。本当に辞めてしまつていいのか、時間をかけて考えてほしい」  
「はい。もう少し、辞めないで済むように努力してみます。仕事……やっぱり好きですから」  
そう返事をする、部長は、昨日私が書いた退職届を持ち出して、目の前で破いてクズかごにポイと捨ててしまった。

「あっ……」

保留のつもりで言ったのに。

困惑しながら、それ以上なにも言えなかつたのは、そこに「辞めさせない」という彼の強い意志があるように思え、嬉しくなつたからだ。

部下として大切にしてもらえるなら、それで十分はず。

食事を頂いたお礼に、私が食器を洗っている間、部長はそのままダイニングで新聞を読んでいた。

「あの、いろいろありがとうございました。お世話になりました。……帰ります」

この経験を、無理やりにもいい思い出にしなければならぬ。あまり長居して、割り切れない女に成り下がるのはいやだ。

「待つて」

立ち去ろうとした私を、なぜか部長が引きとめた。

「いや、あの……今日は休日だ。ゆっくりしていつたらどうかな？ 君は一時間くらいしか寝てい

ないから」

「家に帰って寝ます」

「……結城くん、一回男と寝たくらいでセックス上級者になつたつもりなら、それは大きな間違いだと思つて」

「えっ？」

「はっきり言ってキスも下手だし、君は男を気持ちよくさせるテクニックなんて知らないだろう？ そんなんじや、まだ自信を持つて前にすすめないんじやないか？」

「……」

畳みかけてくる部長は、昨日の意地悪なほうの人格だ。

「もう少し、訓練をしたほうがいいんじゃないかな」

「そ、そうですか？」

「……僕でよければ、特訓に付き合おうけど」

すつと伸びてきた手が私を囲う。選択肢は与えないと鋭く睨む。

「……部長」

見つめれば、恋人同士のような甘いキスをくれる。

「そうじゃないだろう？」

「……諒介さん」

「よくできました」

ご褒美のつもりなのか、部長が私を抱き寄せて頭を撫でた。

急にご機嫌になった瀬尾部長の真意は、どこにあるのか。都合のよい解釈をしまいそうになり、あわててその考えを打ち消した。

## 2

あの晩から、週末が近付くにつれ、彼女のことでも頭がいっぱいになり、落ち着かなくなる。

自分でも、らしくないことをしたと思っている。今まで、社内の女性と深い関係になったことは、一度もなかった。理性で、そういう対象からは外していたからだ。

彼女——結城操はただの部下だったはず。持っていた印象は、もちろん「よい」だったが、それはあくまで一緒に仕事をする人間として。不埒な感情を宿しながら接したことなどなかった。

それなのに、彼女から交際相手と別れたと言われた瞬間、今までの自分の思い込みと常識が吹き飛んだ。

そして、否応なく自覚させられた。自分の中に潜んでいた、激しい男の感情を。

はじめて二人で夜を過ごしてから、三度目の週末が近付いている。

先週は金曜の夜に食事に誘い、そのまま僕の自宅で丸二日間過ごした。

泊まりの支度などしてこなかった彼女が、着替えがないことを理由に帰ろうとしたので、寝室に引きずり込んで、その氣力を奪うという愚行で引きとめた。

青臭いガキでもあるまいし、ただの欲まみれの逢瀬を繰り返すのはいかかなものか。

自分でもそうわかっているが、別の魅力的なプランが思いつかない。

今週末も彼女と二人きりで過ごしたい。そのために断りの口実にされそうな事柄は、すべて消し去っておかなければ。

一番いいのは、ストレートに泊まる準備をしてきて欲しいと頼むことだ。しかし、まだはじまつたばかりの関係なのに、束縛が強く、粘着質な男だと思われるのは避けたい。

なるべく自然に、彼女を留め置きたい。

水曜日、昼食はコンビニのサンドウィッチと缶コーヒーでさつさと済ませた。

僕が昼の電話番を申し出たおかげで、部署内のメンバーは皆どこかへランチに行ったらしい。

周囲に誰もいないことを確認し、スマホを取り出す。

最初はコンビニで買えるものよりましな着替えを、彼女のために用意しておこうと考えていた。

仕事柄、女性の服の情報に毎日触れているから、世間一般の男より詳しく、また買い物に抵抗は感

しない。

まず、着心地のよさとかかわいらしいデザインで人気の部屋着を調べ、そこからごく普通の機能的な下着へ。しばらくすると、僕の興味はセクシーなランジェリーに移っていく。

肝心な部分が透けているブラジャー、なにも隠せないショーツ。魅せるためにしか必要ないであろうベビードール。外ではとても穿けない妖艶な色のパンスト。

スクロールしていくと、そこには僕の気持ちを見透かしたように、アダルトグッズの広告バーナーが。

人差し指が、勝手にそこへ向かって動いてしまう。広告の画像に載っている、その柔らかそうな手錠をつけた操の姿を想像しそうになった。

なにをしているのだろうと、はっと我に返ったが、遅い。

「——諒ちゃん、変態だ……」

背後から人の声がして、僕はびくりと肩を揺らした。

「龍之介！ 会社でその呼び方はよせと言っているだろう」

いつの間にかうしろに立ち、顔をニヤつかせていたのは、同い年の従兄弟、龍之介だった。

「人前では控えてるよ、一応ね。それより深刻そうな顔でなにかかと思っただら……なんでアダルトグッズ？ 変態だね。あのクールな瀬尾部長が、お昼休みに、いやらしいサイトを見ているなんて！ 女性社員が聞いたらショックで寝込むよ」

「うるさい。お前はなぜここにいる？」

「ひどいな。同じ会社にいるんだから、会いに来てもいいでしょう？」

龍之介は、この会社の経営者一族の直系で、現会長の内孫にあたる。看板ブランドのトップデザイナーとして活躍している男だ。

彼はいかにもデザイナーらしく、服装のセンスが独特だった。今日穿いているスラックスは一切のゆとりがないほど細く、わざとくるぶしの丈で切られている。僕の主観では、スーツを冒涇するような奇抜な服装をしていた。

決められたアイテムを決められた通りにしか着ない僕とは、相容れない着こなしだった。

外見と同じで、彼は性格も自由人だ。

やるべき仕事はこなすが、いつもフラフラしている印象がある。

一族と役員以外には事情を知らせていないが、外孫の僕がここに籍を置くのも、将来、龍之介には経営を任せられないからと、祖父や伯父から頼まれたからだ。

「ねえねえ、彼女？ 新しい彼女ができたの？ 諒ちゃんが、いやらしいグッズを使いたくなる相手って、どんな子？」

「どうだっていいだろう。お前には関係ない」

少しでも龍之介に話したら、明日には両親の耳に届き、面倒なことになる。

三十歳を過ぎた頃から『そろそろ結婚を』と周囲から急かされるようになった。すると急に、特



別な女性をつくることに慎重になってしまった。自分の私生活の大部分に、他人が入り込んでくることが想像できなかった。

操はそんな僕にとつて、久々にできた特別な相手だ。

ただ、どうやら彼女は「割り切った大人の関係」を僕が望んでいると解釈しているらしい。

それを訂正できなかったのは、僕が心のどこかで職場の人間と交際することを、またためらっているからだ。

できるなら、僕の抱える問題に、彼女を巻き込みたくない。

しかし、彼女も家族との関係で悩んでいる。あれからなにも言っていないが、解決したわけではないだろう。僕達は今後のことを早めに話し合う必要があった。

しつこく探りを入れてくる龍之介のからかいをかわしながら、そんなことを考えていると、いつの間にか時計の針は十二時五十分を指していた。

外に出た社員達が戻ってくる前に、龍之介をどこかに連れ出そう。

席を立とうとしたところで、別の人間が部屋に入ってきた。今日はとことんタイミングが悪い。

一番最初に昼の休憩から帰ってきたのは、操だった。

「やあ、結城ちゃん。おかえり」

「チーフ、お疲れ様です。部長も、電話番号ありがとうございます」

こいつ、なぜ馴れ馴れしく「ちゃん付け」なんてしているんだ？

無意識に小さく舌打ちしてしまい、すぐさま後悔する。龍之介がフランクなのはいつものこと。

つまらないことで苛立ちを覚える自分のほうがおかしい。

一方の操は、龍之介を「チーフ」と呼んだ。一部の女性社員のように「リュウ先生」などと親しく呼ばなかったことに安堵する。

「ねえ、結城ちゃん知ってる？」

僕の舌打ちを聞き逃さなかったのか、龍之介の口元がだらしなく緩んでいた。勘づかれたかと、今度は心の中で舌打ちする。

「君の上司に、最近恋人ができたみたいんだけど、心当たりある？」

「さあ、部長のプライベートは、存じ上げませんから」  
即答だった。

特に動揺した様子もなく、顔色ひとつ変えずに、彼女はすでに午後の作業予定に目を通していている。同じ職場で働いているのだから、関係を隠すのは必然で、彼女は正しいし、僕もそれを望んでいる。

しかし、女優でもないのにその役者っぷりは、一体どんなスキルだ。操は比較的感情が表に出やすいタイプだと思っていた。

「結城くん……」

無意味に名前を呼んだ。操は冷ややかな視線を僕に向けてくる。

「なにか？」

話しかけるなど、目が語っている。

僕はあわてて適当な業務連絡を伝えてごまかした。

ひしひしと覚えるこの違和感は一切なんだ。

午後の就業まであと五分。僕は龍之介を追い出したあと、仕事をはじめたふりをして、スマホから彼女にメッセージを送った。

『今夜、食事でもどうか？』

操のデスクがある辺りで、バイブレーションの音がかすかに聞こえた。真面目な彼女はそれを確認しようともしない。

そこでふと、恐ろしい事実に気付いてしまった。

身体だけの関係では足りないなどと思っているのは自分だけで、彼女は、それ以上を望んでいないのではないか。

そうだとしたら、すぐにでも認識のすり合わせをしておかなくては。

## §

終業時刻をすぎ、ようやくメッセージが既読になる。

『了解しました』

彼女からの返信は、驚くほど素<sup>そ</sup>つ気<sup>け</sup>ない。それでも断られたわけではないから、よしとしよう。

すぐに会社から少し離れた、彼女の通勤路線にある駅近くの、ドイツ料理の店を予約した。以前大学時代の友人と行ったことがある店だ。

場所と時間の連絡を入れると『OKです』とまた短い返事が送られてくる。

「とりあえずお疲れ」

「部長も、お疲れ様でした」

ビールで乾杯し、ザワークラウトが添えられたソーセージの盛り合わせをつまむ。

「おいしいですね、これ」

操は酸味のやや強い、店の自家製ザワークラウトをお気に召したようだ。純粋に喜ぶ顔が見られたので、この店を選んで正解だったと思う。

一杯目のビールを飲み干したあとは、明日の仕事を考えて二人共ソフトドリンクを注文した。白身魚と野菜のスープ、パンもテーブルに並び、空腹は満たされていく。

「今期の展示会の準備は順調そうだね」

「はい、サンプルも間もなく仕上がってきますし、この時期残業ナシで帰宅できたのは、入社してからはじめてです」

彼女とは、先週も外で食事をしているが、前回より他人行儀になっている気がする。おいしそうに食事をし、楽しそうに話をするが、会話の内容は仕事のことばかりだ。

二人の関係についてなど、言い出しにくい雰囲気ではある。だが、このまま放置はできない。この関係を軌道修正する必要があった。

「結城くん、話があるんだ……」

はじまりが間違っていたのだとしたら、やり直せばいい。僕が姿勢を正し、口を開こうとすると、その前に彼女が先に言葉を紡ぎ出す。

「後腐れない関係ですよね、わかっています。短い間でしたが、お世話になりました」

深々と頭を下げた彼女を目の当たりにして、一瞬間が真っ白になった。

なんなんだ、これは。告白する前に振られた気分だ。

「いや……絶対わかってないだろう」

「ちゃんとわかっています。部長に恋人ができて、もう私とはこれきりにしたいんですよね」

「違う。昼間、龍之介が言ったことを、そう受け取ったのなら大きな誤解だ。君の他に親密な相手はいない」

僕は真摯に訴えた。すると、彼女はようやく「そうだったんですか」と、少しだけほっとした顔を見せる。いつもの彼女が戻って来た。

「チーフの勘違いだったんですね」

龍之介の言った「新しい恋人」とは「君」だと伝えたつもりが、これは軽く流された。

また、少しずつ不満が蓄積されていく。最初の日の朝もそうだった。

操はこちらが引きとめないかぎり、あっさりとう去って行ってしまふ。なんの未練もないのだと言われているようだった。

彼女との関係に、その心地よさにはまっているのは、やはり自分だけだという現実を突き付けられた気分だ。

僕は根っからの負けず嫌いだ。僕と同じかそれ以上に、彼女にも僕に関心を持ってほしいと、傲慢な欲望が湧いてくる。

今夜、正式に恋人になる提案をするつもりだった。

しかし今のままでは、完全に僕の独りよがりだ。まずは、彼女の気持ちを手に入れなければ。

正しい恋人の在り方とはどういうものか。二人が会う理由は、セックスだけが目的ではないんだと、伝わるように行動で示すのはどうだろう。

食事を終えても時刻はまだ夜の九時前で、今すぐ別れなければならないほど遅くはない。

「そろそろ帰ろうか？ 送っていくよ」

「まだ、電車があるので」

「君の部屋を見てみたいんだ」

そう言って押し切ると、彼女は「狭いですよ」と言いながら頷いた。

操の暮らす部屋に行ってみたいのは本心だ。どんな場所でどんな暮らしをしているのか、今は純粋に興味がある。

もし部屋に上げてもらえるのなら、お茶を飲んですぐに帰ろう。帰り際に軽くキスだけして別れる。

それがぱつとひらめいた、今夜のプランだった。

店を出ると、車道と歩道の境界線に二人で並び、無言でタクシーを待つ。

ひとつ向こうの交差点からこちらに「空車」のタクシーが向かってきていることを確認し、手を上げる。停車したタクシーに乗り込む前に、彼女が小さく呟いた。

「壁……薄いのは嫌いなんですよね？」

思わず、唾をぐくりと呑み込んだ。さっきまでのよそよそしい態度はどこへ行った？

心なしか操の瞳は潤んでいて、さりげなく髪を耳にかけた仕草は煽情的に僕を誘う。

タクシーに乗り込むと、僕はすぐに操の手を握った。窓の外を眺めてこちらを見ない彼女が、それでもしっかりと握り返してくれる。

小悪魔なのか？ わかっていて煽っているのか？

紳士的に送り届ける予定は、早々に打ち砕かれ霧散していく。

彼女の部屋に到着するまでの間に、僕は不品行な願望にすっかり支配されていた。

S

彼女の住むアパートに着くと、形式的にコーヒーをすすめられたが断り、早急に唇を奪った。

タクシーの中で手を繋いでいた二十分ほどの時間に、内なる熱をためていったのは、僕だけではなかったようだ。

顔を近付けると、操は欲情を帯びた瞳でじっと見つめたあと、ゆっくりと目を閉じてくる。

僕が薄く開いた唇を塞ぎ、身体を抱きしめると、彼女もすぐるように腕を回して応じてくれた。単身者用のごく普通のアパート。入ったらすぐにキッチンや風呂場があり、数歩先は彼女がいつも過ごしているだろう部屋に繋がっている。

操がどんな生活をしているのか、どんなものに囲まれていてどんな色を好むのか、気になつてい

たはずなのに、すでに違う好奇心に塗り替えられている。

玄関からベッドまでの距離が近いのは悪くない。抱き合ったまま、なだれ込んでしまえるから。

いつもとは違うスプリングとフレームが軋む音が新鮮で、いっそう気分が高揚する。これまでは操が欲してくれるまで、じつくりと執拗な愛撫で追い詰める手法を取ってきたが、今夜は今すぐにも繋がりたい気分だ。

服を脱がす手間さえ惜しんで、必要なところだけだけさせ、剥き出しにした胸のてっぺんを甘